Hard Times における reasoning animals について[1)]

近　藤　　浩

序

本小論のタイトルは、チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812–70）の *Hard Times*（1854）の冒頭部分から着想を得たものである。そこには、架空の商業都市コークタウン（Coketown）の権威者トマス・グラッドグラインド氏（Mr. Thomas Gradgrind）が、自ら設立した学校の教室で、来訪者に向けて語る演説がある。

> 「さて、私が求めるものは、事実です。ここにいる男女の子供たちに事実以外のことを教えてはなりません。事実のみが人生に必要なものなのです。他のものは何も植えつけてはならないし、他のものはすべて根絶やしにしなければなりません。理性的な思考をする動物の心は事実に基づいてのみ涵養することができるのです。他のものが彼らにとって役に立つことはないでしょう。これは私が我が子らを養育するのに用いた原則であり、ここにいる子供たちを養育するために用いる原則です。事実に固執せよ、ですよ。」(1)[2)]（下線は筆者による加筆）

この引用の中で、グラッドグラインド氏は事実主義に基づく教育の重要さを訴えている。いかにも問題がありそうな教育方法だが、何よりも筆者の興味を引いたのは下線を付した部分である。その部分は原文では “the minds of reasoning animals” となっている。この reasoning という行為自体は、人間に備わる徳目の一つであると思われるのだが、それに animals という語が続くとなると、かつて日本人が「エコノミック・アニマル」と呼ばれたときのように、reasoning

を行う人間が揶揄されているのは明らかである。そこで、ディケンズが reasoning animals という表現を用いて読者に伝えようとしていることを探ってみたい。

1

あらかじめ確認しておきたいのは、ディケンズ作品において、理性的に考えるという行為、すなわち reasoning が、主要登場人物に必要不可欠な行為であるという点である。

最初の長編作品 *The Pickwick Papers*（1836–7）において、ウィンクル氏（Mr. Winkle）は、サミュエル・ピクウィック氏（Mr. Samuel Pickwick）から、息子ナサニエル（Nathaniel Winkle）が自分に無断で結婚したことを告げられた際、怒りや悲しみを露わにすることを避け、時を置いて自分の目で息子の妻アラベラ（Arabella）の人柄を確かめた上で、息子の結婚を許してやるのである[3)]。

これに続く作品 *Oliver Twist*（1837）では、ブラウンロー氏（Mr. Brownlow）の reasoning が物語の推進力となる。この裕福な老人は掏摸に間違われた少年オリヴァー・トゥイスト（Oliver Twist）を見て、次のように言う。「どうもあの子の顔には何か……何か私の心に触れ、私の興味を引きつけるものがある。この子が無実だという可能性があるのではないか？　この子は誰かに似ている。――はて……ああ！　どこでこの子に似た顔を見たのだろう？」（*OT*, 70）ブラウンロー氏は、この疑問を起点として、オリヴァーが亡くなった自分の親友の子供であるという事実にたどり着くのだが、もしブラウンロー氏が自分の直感の理由を冷静に追及しなければ、物語のハッピーエンディングはなかったわけである。

また、ディケンズの円熟期の作品 *David Copperfield*（1849–50）において、主人公デイヴィッド・コパフィールド（David Copperfield）は前妻ドーラ（Dora）を病気で亡くした後、アグネス・ウィックフィールド（Agnes Wickfield）を自分の再婚相手として考えてはいけない理由を理性的に考察している。その場面に[4)]、物語の文脈を補って、デイヴィッドの考えを解説すると次のようになる。自分（デイヴィッド）はアグネスを選ばず、ドーラと結婚した。それでも、アグネスは自分を兄弟のように愛してくれている。今さら自分勝手な理由でアグネスの自分に対する愛を乱してはならないし、そんなことをすれば、アグネスの愛情を失うかもしれない。だからそれをしないのが自分の義務である。また自分は自分の道を切り開き、自分が無性に欲しかったものは手に入れたのだから、手の届かないものがあったとしても文句を言う資格はないし、耐え忍ばなければならない、そのことも年相応に確信している。以上がアグネスに関するデイヴィッドの reasoning である。自分の気持を抑え、理性的に考えることができるデイヴィッドであればこそ、最終的にアグネスの愛を得ることができるのである。

2

では、なぜ *Hard Times* において reasoning という行為が揶揄されるのかを考えてみたい。それには、まずグラッドグラインド氏の信念を知ることが必要になる。

グラッドグラインド氏は、自称「現実主義者」(3) であり「事実と計算を重んじる男」(3) であり、娘ルイーザ (Louisa) と息子トム (Tom) だけでなく、学校の子供たちにも、事実と計算に基づいて考えることを要求し、空想することを禁じている。彼にとって、空想はノンセンスの同意語であるからだ。そして「家族の理性の涵養」(18) に身を捧げてきた彼が子供たちに与える極めつけの教訓は、「驚くなかれ。」(49) というものである。

> ［この言葉のなかにこそ］恥を忍んで感情や愛情を育むことなく理性を涵養する機械的技術と神秘の源泉があった。驚くなかれ。足し算、引き算、掛け算、割り算によって、なんとかしてあらゆることを解決せよ、そして決して驚いてはならぬ。(49)

「驚くなかれ。」は原文では "Never wonder." である。「不思議に思ってはならぬ。」と訳してもよい。この教訓は、すべての問題を計算に基づいて迷うことなく冷静に解決するのに必要な心構えを表すものである。

グラッドグラインド氏が子供たちにこれほどのことを要求する理由は、次の引用中に示されている。

> あらゆることは代金を支払ってなされるべきだというのがグラッドグラインド哲学の基本原則であった。誰もどんな理由があろうと、売買行為抜きで、誰かに何かを与えたり援助をしたりしてはならなかった。感謝の念は廃されるべきで、その念から生まれる美徳など存在するべきでなかった。誕生から死に至るまで、人間の生存中の歩みは 1 インチ刻み、すべて勘定台越しの契約であるべきだった。そしてもし私たちがそのやり方で天国にたどり着けないのなら、そこは政治経済の場所ではなかったし、私たちはそこに何の用もなかったのだ。(288–9)

グラッドグラインド氏は引退した金物卸業者であり、上記の考えは商売を通して培われたものと考えられる。彼は決して不親切な人間ではない。父親に去られた少女シシー・ジュープ (Sissy Jupe) を自宅に引き取ったのがその証拠である。研究者ジョセフ・ゴールドが言うように「彼は悪い男というよりもむしろ考え違いをしている男だということである。実際、彼は常

に人間の運命を改善しようとしてきたのである……。」（Gold, 200）彼はこれまでの50年ほどの人生の中で、感情や愛情がビジネスの妨げになることを学び、その教訓を自分の子供たちや学校の児童らに知恵として学ばせているということである。

先の引用中に示されるビジネスのあり方は、多少の誇張はあるにしても、*Hard Times* が執筆された1850年代の状況を映すものと考えられる。1851年にはロンドンのハイドパークで万国産業製作品大博覧会が開催され、大英帝国は、その博覧会を通じて、自国の経済の繁栄と商業の卓越ぶりを国内外に誇った。エイザ・ブリッグズ著『ヴィクトリア朝の人々』によると、博覧会の目的は「全人類の発展が到達した現段階を正しく検証し、その生々しい描写を与えること……およびそこから今後あらゆる国民が一層の努力を行使することのできる新たな出発点を提示すること」（ブリッグズ，22）であった[5)]。それゆえ、博覧会以降も、英国人はビジネスにおいて一層の成果を求められたはずである。そんな社会情勢の中で、実際にグラッドグラインド氏の哲学に見られるような人間味のないビジネスが営まれていたと見るべきである。その現状に対処するために、空想や感情を排した事実と計算に基づく思考が求められたのであり、子供たちにも将来に備えてその思考法を教え込む必要があったのである。

3

こうした思考法を修得すると、“the minds of reasoning animals” を身につけることになる。この表現の中で「心」を示す語として mind が用いられていることが、かなり重要である。一般によく知られているとおり、mind は理性の宿る心、heart は感情の宿る心を表す。この mind と heart に関連して、グラッドグラインド氏は次の引用のように言っている。これは物語の後半で、彼が娘ルイーザに自分の教育法の誤りを突きつけられて衝撃を受けた日の翌朝に、彼女に向かって述べる言葉である。

> 「こう考える者もいる」と彼は、まだためらいがちに言葉を続けた、「Head の知恵もあれば、Heart の知恵もあるのだと。私はそのように考えてこなかった。しかし、すでに言ったように、今私は自分に疑いを抱いている。私は head だけで十分だと考えてきた。それだけでは十分でなかったかもしれない。今日という日の朝、どうしてそれで十分だと言えるだろうか！　万が一そのもう一方の種類の知恵こそ私がおろそかにしたものであり、今必要とされている本能だと言うなら、ルイーザ――」（223）

「Head の知恵」は、理性の宿る mind において生み出されるものである。グラッドグラインド

氏に上に引用した言葉を言わせることによって、ディケンズは、グラッドグラインド氏の思考法が head と heart を分断するための手段であることを示しているのである。

4

では、mind のみで行う reasoning とはどのようなものかを考えてみよう。そのためには、グラッドグラインド氏が自分の年齢に近いジョサイア・バウンダビー氏（Mr. Josiah Bounderby）を娘のルイーザに結婚相手として薦める場面を見るのが良いように思われる。バウンダビー氏は、コークタウンにおいてグラッドグラインド氏と肩を並べるもう一人の権威者で、商人であり、工場主であり、銀行家でもある。グラッドグラインド氏は娘に「お前は衝動的ではないし、ロマンチックでもないし、理性と計算という力強く感情に左右されない見地から全てのことを考察することに慣れている。」（96）と述べたうえで、結婚の提案を単なる事実して考えるようにと娘に助言し、次のように言葉を続ける。

> 「さて、この場合の事実は何か？　お前の年齢は、おおよその数値で言うと、20歳だ。バウンダビー氏はおおよそ50歳。二人には年齢の点で、多少の不釣り合いがあるが、資産と社会的地位の点では不釣り合いはない。それどころか、すばらしく釣り合っている。すると、こんな問題が持ち上がってくる。この一つの不釣り合いは、今回のような結婚の障害として機能するほどのものか？　この問題を考える際には、これまでに入手できた数値として、イングランドとウェールズにおける結婚の統計を考慮に入れることが大切になる。その数値を参照すると、これらの地域における結婚は、非常に年齢差のある男女の間で行われているケースが多いことがわかるし、このような結婚契約を結ぶ当事者のうちで年長者になるのは、こうした事例の 4 分の 3 以上の場合において、花婿の方なのだ。この法則が広く行き渡っていることを示すものとして、インドの英国領の地元住民の間でも、中国のかなりの地域でも、タタール地方のカルマナック族の間でも、旅行者によってこれまでに我々に提供された最善の計算方法を用いると、同様の結果が出てくるという事実は、注目に値する。それゆえに、私が言及した年齢の不釣り合いは、不釣り合いでなくなったのも同然で、（実質的には）消え去ったようなものだ。」（98–9）

上の引用からわかるように、事実（ここでは統計の数値）だけを根拠にした思考法が、mind のみで行う reasoning の特徴である。この思考法が最良のものだと信じるグラッドグラインド氏は、花婿が花嫁よりかなり年上である場合が多いという事実を指摘すれば娘を説得できる、

と本気で思っているのだ。彼の目には、憎んでさえいる男を夫に迎えなければならないという娘にとっての辛い現実は映らない。その一方で、彼は、花婿の年齢は花嫁の父親に近い場合が多いという事実までは示せていないことに気づきもしない。彼の説得の仕方を見る限り、mind のみで行う reasoning は、都合のよい事実だけを根拠にした視野の狭い思考を生むと言うことができる。

さらにグラッドグラインド氏は自分の思考法に基づき、結婚から愛情という要素を取り除こうとする。ルイーザから「お父さん……私がバウンダビーさんを愛しているとお思いですか？」(97)、「お父さん……私にバウンダビーさんを愛するように頼んでいるのですか？」(97)、「お父さん……バウンダビーさんは私に愛してほしいと頼んでいるのですか？」(98)、と矢継ぎ早に三つの質問を突きつけられた際に、グラッドグラインド氏は困惑して返答に窮してしまう。そして彼は愛情という表現は不適切であるとし、それらの質問に代えて、「バウンダビー氏は私に結婚してほしいと頼みましたか？」(99)、「私は彼と結婚しましょうか？」(99) と問うように指示するのである。これはグラッドグラインド流の reasoning では愛情や感情の問題を処理できないということを示している。

また、この結婚話の場面において、ディケンズは、グラッドグラインド式の heart を切り捨て mind だけを働かせて行う reasoning が、他人を説得できないことを示している。ルイーザは最終的に父親からの結婚の提案を受け入れるが、それは彼女が父親の reasoning に押し切られたからではない。喜びを見つけられない人生において、彼女は自分の一生がはかないものと感じるようになっており、「[私の人生] が続く間は、私にできるわずかなこと、私がするのにふさわしいわずかなことをしたいと思うでしょう。かまうものですか。」(100) と言い放つ。そして彼女は結婚を承諾するのだが、これは、バウンダビー氏の銀行に勤める弟トムの役に立てることだけを願っての決断なのである。彼女はトムのことを「私の生涯のありったけのささやかな優しさの対象」(217) と言っている。彼女は弟のため、heart の力で強引に自分の mind を説得したのである。事実と合理性だけに基づく reasoning は、人間の heart を動かせないのである。

5

「謙遜の暴君 (the Bully of humility)」(14) という異名を持つバウンダビー氏は、その点を意識している人物ではないだろうか。というのも、彼は事実と合理性に驚きという要素を加えて他人を納得させようとするからである。バウンダビー氏は事実主義者として、自らの立身出世物語を驚愕の念を込めて語るのだが、その始まりは、以下のようである。

「わしは靴の片方すら履いちゃいなかった。ストッキングなんて、そんなものがあることすら知らなかった。日中はドブの中、夜は豚小屋で過ごす。そうやってわしは10才の誕生日を過ごしたんだ。ドブはわしにとって目新しいものじゃなかった、なぜってわしはドブで生まれたんだから。」(15)

上の引用の後で、バウンダビー氏は、母親に捨てられ、飲んだくれの祖母から逃げ出し、あちこちで邪魔者扱いされながらも誰にも頼らず現在の地位まで成り上がった歴史を語り、こう結ぶ。「……あんたは［コークタウンのジョサイア・バウンダビー］に煮えたぎる料理用あぶらを飲ませることはできるかもしれん、だがこの男にそいつの人生の事実を隠蔽させることなど絶対にできませんぞ。」(16) しかし、事実は真実と異なる。彼が刻苦精励して工場経営者の地位を得たことは確かだが、彼は愛情深い母親や親切な親方の世話になっていたのである。研究者松村昌家は、バウンダビー氏が自分を卑しい生い立ちの記の主人公としている理由を次のように述べている。「……バウンダビーは、想像し得る限りの最底辺から這い上がった経歴を想定することによって、コークタウンの労働者たちの貧困からくる不満と、毎日の単調な労働生活からの解放の要求を退ける戦術に、それを役立たせているのである。」(松村，184–5) 筆者はこの意見に賛成である。バウンダビー氏が意図的に驚きを他人の説得に用いているのは間違いない。

彼が驚きを重視する証拠は他にもある。彼の銀行が何者かの襲撃を受けた際、彼は必要以上に騒ぎ立てる。グラッドグラインド氏によってコークタウンに送り込まれたジェイムズ・ハートハウス氏（Mr. James Harthouse）から奪われた金額を尋ねられた際に、バウンダビー氏はいらいらしながら「せいぜい150ポンド」(181) だが重要なのは「銀行が襲われたという事実」(181) だと答え、仮定法過去完了を用いて「だがいいですかな。［盗まれた金額は］ 2 万ポンドになっていたかもしれないのですぞ。」(181) と続け、被害額は 2 万ポンドの 2 倍だったかもしれないとまで言う。このことは、彼が事実と異なろうとも現実の出来事には驚きという脚色が必要だと考えていることを示している。

バウンダビー氏は、驚きを用いて他人の heart を揺さぶり、動かされた heart の影響力をもって mind における思考を左右しようとする。つまり、彼は、reasoning には heart の助力が不可欠であることを熟知しているのである。しかしながら、彼の驚きの用い方は、悪意あるマインド・コントロールに通じるものである。また、「驚くなかれ。」という教訓がコークタウン全体に響き渡る「基調（the key-note)」(49) であり、バウンダビー氏がその教訓を支持する立場にあることを考慮すると、彼の行為は背徳的な印象を残してしまうことになる。

6

バウンダビー氏の驚きの活用の仕方は容認されるべきものではない。彼の立身出世物語を彩る偽りは、彼の母親ペグラー夫人（Mrs. Pegler）が語る愛の真実によって暴かれ、「ヴィーナスよりも賞賛されるべき商業界の驚き（a commercial wonder more admirable than Venus）」（246）と称えられたバウンダビー氏は、「セルフ・メイド・マン（a self-made man）」（246）から「セルフ・メイドのいかさま師（self-made Humbug）」（263）へと成り下がることになる。これはディケンズがバウンダビー氏に与えた罰である。

バウンダビー氏は使い方を間違えたわけだが、ディケンズは驚きが人の heart を動かすのに不可欠であると信じている。サーカス団を率いるスリアリー氏（Mr. Sleary）は、演目を通じて観客に驚きを提供するがごとく、グラッドグラインド氏に驚くべき犬の話を語る。シシーの父親の犬メリーレッグズ（Merrylegs）が、他の犬たちに道を尋ねながらスリアリー氏の居場所を探しだし、たどり着いたサーカスのリングで「自分が知っている子供を探しているかのように」（292）団員の子供たちを一人一人見て回った後、スリアリー氏の前で最期の芸を見せて死んでしまう、という話である。犬はシシーの父親が亡くなったことと、その父親が最期の時まで娘を愛していたことを伝えるために、命を削って旅してきた。スリアリー氏はこの話を基にして、世の中には愛というものがあること、そしてその愛は、犬をスリアリー氏の所までたどり着かせたような、説明のできない力を発揮することを説く。話を聞いたグラッドグラインド氏の様子は次のように描かれる。「グラッドグラインド氏は窓の外を見つめ、何の返事もしなかった。」（293）彼の沈黙は、彼がスリアリー氏の説諭に納得したことを示している[6)]。犬の感動的な物語が、彼の heart を動かし、彼の mind の中で事実と合理性では説明できないものの存在を認めさせたのである。

7

実はグラッドグラインド氏は無意識のうちにシシーの heart を動かしたことがある。彼はシシーに彼女を引き取って教育しようという申し出をするが、その際、彼女に自分の家庭とも言うべきサーカス団との付き合いを絶つという厳しい条件を突きつける。そして彼は彼女の決心を聞く前に、次の忠告を与える。「自分自身の心のうちがよくわかっているか確かめなさい！（Be sure you know your own mind!）」（38）彼女の決心の後押しとなるのは、彼女の父親が娘の教育を望んでいた節があるという、グラッドグラインド氏からの情報である。彼女は父親を愛するがゆえにグラッドグラインド氏の申し出を承諾するのである。この場面はグラッドグライ

ンド氏が他人の heart を動かして、mind における reasoning を導いた唯一の例である。

ディケンズは、上の場面の後、heart を重んじるシシーの言動を通して、グラッドグラインド式のものとは別の reasoning があることを示していく。グラッドグラインド氏はシシーを自宅に引き取り、彼女に事実主義に基づく教育を受けさせるのだが、彼女が事実と計算に基づく思考を身につけることはない。その現実を見て、グラッドグラインド氏は、彼女の幼い頃の環境が「理性に基づいて思考する力（reasoning powers）」（91）の発達にとって好ましくなかったのだと結論する。しかし、そんな彼女の言葉がルイーザを救うことになるのである。ルイーザが、バウンダビー氏との愛のない結婚生活とハートハウス氏の駆け落ちの誘いに苦しみ、感情を制御できなくなって自宅へ戻り、気を失って父親の足下に倒れた日の翌朝、シシーはルイーザの傍らへ行き、ルイーザの求める何かになりたいと訴え、そうなれるよう努力させてほしいと頼む。その後に続くのが次の引用である。

> 「父があなたを差し向けてそう頼むように言ったのね。」
>
> 「いいえ」とシシーは答えた。「旦那様は私に部屋に入ってもよいとおっしゃいましたが、今朝は部屋から私をお出しになりました――あるいは、いずれにしても――」彼女は躊躇して言葉を切った。
>
> 「いずれにしても、の続きは？」とルイーザは、探るような目でシシーを見て、言った。
>
> 「私は離れているのが一番良いと思ったのです、と申しますも、私がここにいることがあなたのお気に召すことなのかよくわからなかったのです。」
>
> 「私はいつもあなたのことをそんなに嫌っていたかしら？」
>
> 「そうでないことを祈ります。というのも、私はいつもあなたのことが大好きでしたし、あなたにそのことを知ってもらいたいと願っていましたから。でもあなたが家を出られる少し前から、あなたの私に対する態度は少し変わりました。そのことを不思議に思ったというのではありません。あなたはとても多くのことをご存知で、私はほとんど何も知らないのですから。それに他のご友人の方々ともお付き合いをされていたのですから、あなたの態度が変わるのは、いろいろな点において当然のことです。そのことで、私が不平をいうことはありませんし、傷ついたこともありません。」
>
> シシーが控えめに急いでそう言ったとき、彼女の顔の赤みが増した。ルイーザはそんな愛情のこもった偽りを理解した。そしてシシーの heart がルイーザを強く打った。（225）

この引用から、ルイーザの理性的で淡々とした質問に、シシーが愛情を込めて答えていることがわかる。この後、シシーが、自分がルイーザの力になれるかどうか試させてほしいと言う

と、ルイーザはシシーの本気度を試すように Yes-No 式の質問をする。ルイーザは、自分は本当は高慢で、頑固で、怒りっぽくて、正しい判断ができない人間だが、それでも自分を拒絶しないかと問う。また彼女は、自分は分別がなく、シシーが思うほど博学でなく、最も簡単な真理から学び始める必要があり、平和とか満足とかのあらゆる良いものに導いてくれる案内人を必要としている人間だが、それでも自分を拒絶しないかとも問う。どちらの質問にもシシーは、きっぱり No と返事をする。この一連のやり取りは、シシーが自らの愛情あるいは heart を用いて、ルイーザの理性あるいは mind を解きほぐそうとしていることを示しているのだ。そして、それに成功したからこそ、シシーはルイーザの「心の闇に差す一条の美しい光」(225) になれるのだし、二人の間に次のやり取りが交わされるのである。ここは原文のまま引用したい。

> ‘Forgive me, pity me, help me! Have compassion on my great need, and let me lay this head of mine upon a loving heart!’
>
> ‘O lay it here!’ cried Sissy. ‘Lay it here, my dear.’ (226)

この引用は、シシーの心すなわち loving heart が、悩めるルイーザの理性すなわち head に寄り添ったことを示し、ルイーザが人間らしい思考の仕方を取り戻すきっかけを与えられたことを表しているのである。

結論

最後に、ここまで述べたことから、ディケンズの reasoning animals についての考えをまとめてみたい。reasoning animals は時代の要請から生まれたもので、ビジネスを行うには適しているのかもしれないが、理性のみを重んじる彼らの思考法は人に幸福をもたらさないし、真に他者を説得できるものではない。「Head の知恵」を生み出すには「Heart の知恵」の助けが必要であり、mind と heart を分離することはできない。これらの真実を、reasoning animals は reasoning human beings に戻るために学ばなければならない。こうしたメッセージを、ディケンズは、同時代に生きるグラッドグラインド氏のような考えを持つ人々に伝えたかったのであろう。

注

1）本稿は2017年12月 2 日にホテル・キャッスルプラザ（名古屋市中村区）に於て開催された第54回片平会冬期研究会での口頭発表に加筆・修正をしたものである。

2）テキストは *The Oxford Illustrated Dickens* を使用した。引用箇所はページ数で記すが、*Hard Times* 以外の作品の場合は、以下のように作品の略号を付す。

PP = *The Pickwick Papers* (1836–7)

OT = *Oliver Twist* (1837)

DC = *David Copperfield* (1849–50)

3）息子の駆け落ち結婚を知ったウィンクル氏の反応と行動については、第50章の後半部分（*PP*, 708–12）と第56章の後半部分（*PP*, 790–4）を参照。

4）デイヴィッドが以下のように内省する場面を指す。

My duty to Agnes, who loved me with a love which, if I disquieted, I wronged most selfishly and poorly, and could never restore; my matured assurance that I, who had worked out my own destiny, and won what I had impetuously set my heart on, had no right to murmur and must bear; comprised what I felt and what I had learned. (*DC*, 857)

5）エイザ・ブリッグズ著、村岡健次・河村貞枝訳『ヴィクトリア朝の人びと』（ミネルヴァ書房）からの引用である。原典では、以下の英文において double quotes で囲まれた部分に当たる。

Its purpose was “to present a true test and living picture of the point of development at which the whole of mankind has arrived … and a new starting point, from which all nations will be able to direct their further exertions.” (Briggs, 15–6)

6）この点については、Gold が次のように詳しく説明している。下記の英文中に含まれる *Hard Times* からの引用箇所（double quotes で囲まれた部分）は、すべてテキストの291ページからのものである。

Gradgrind’s final silence is testimony to his submission to forces and mysteries far beyond his pathetic definitions, for just before this he has persistently applied empty labels of “instinct” and “scent” to explain the dog’s behaviour, to all of which Sleary answered “‘I’m bletht if I know what to call it.’” (Gold, 204)

引用文献

Briggs, Asa. *Victorian People*. 1955. U of Chicago P. Chicago: 1972.（『ヴィクトリア朝の人びと』．村岡健次／河村貞枝訳．京都：ミネルヴァ書房，1988.）

Dickens, Charles. *The Oxford Illustrated Dickens, David Copperfield*. 1948. New York: Oxford UP, 1987.

——. *The Oxford Illustrated Dickens, Hard Times*. 1955. New York: Oxford UP, 1987.

——. *The Oxford Illustrated Dickens, Oliver Twist*. 1949. New York: Oxford UP, 1987.

——. *The Oxford Illustrated Dickens, The Pickwick Papers*. 1948. New York: Oxford UP, 1987.

Gold, Joseph. *Charles Dickens: Radical Moralist*. Toronto: The Copp Clark Publishing Company, 1972.

松村昌家．『ディケンズの小説とその時代』．東京：研究社，1989.

参考文献

Leavis, F. R., and Leavis, Q. D. *Dickens the Novelist*. London: Chatto & Windus, 1970.

Thurley, Geoffrey. *The Dickens Myth*. New York: St. Martin’s Press, 1976.